

平成28年度知事と県民の意見交換会概要

テーマ：女性の活躍による地域活性化の推進

日時：平成28年8月9日（火） 13：00～15：30

場所：道の駅かつの「あんとらあ」体験の場

(知事あいさつ)

お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。

世界では女性の活躍が進んでおり、日本の産業界でもIT関連などは女性社長が非常に多い。特にソフトウェアなど新しい産業では、女性特有の生活実感を地域の文化や歴史などさまざまなファクターと結びつけて地域振興に役立てようという動きがある。

そうした考え方が必要な時代となっており、女性が活躍する国はどんどん発展している。女性のパワーがないと日本も地域もなかなか立ち行かない。

本日はどんな取組でどういうことを目指しているのか、課題や悩みなども含めて気軽にお話しいただき、県としてお手伝いできるヒントをいただきたいと思う。

※意見交換に先立ち、「ふとっぱらバンビーヌ」代表 A氏より活動内容を紹介

【参加者自己紹介】

(B氏)

果樹を専門に農業に取り組んで約30年、面白いことがあるから長く続けてこられた。

北限の桃を鹿角地域で先に始め、いろいろな失敗をしながら今まで来た。

農作業に励んでいる他の女性たちと、いろいろな疑問点をみんなで勉強しようと、今年3月末に「ももが～るず」という会を立ち上げた。活動はまだ始まったばかりで、どういう研修や講習会をしたらよいか検討しているところ。

研修等を通して少しでもいいものを生産出荷し収入を得て、鹿角市や県に税金を払えるような余裕を持てる生活をしたいというのが会の立ち上げのきっかけである。

(知事)

グループは何人くらいか。

(B氏)

現在11人、徐々に増やしていこうかと思っている。

毎年気候も違うし木は大きくなっていくから、常に研修や講習会で勉強していかないと技術が追いつかない。私もいろいろ失敗をしたので、それを少しでも伝えて行ければいい。

(知事)

凍害の復旧状況は。

(B氏)

苗木を補助していただき作付けはほぼ終わった。残っている木は自然増を見込んで生産量も上がっ

ているので、がんばっていきたい。

(C氏)

学生時代を東京で過ごした後、こちらに戻って家業の農業資材販売をしている。

地元に戻っても地域のことはよくわからなかったが、知り合いから青年会議所を紹介されて入会し、10年間まちづくりや人づくりの活動に関わってきた。

会員は10年前より減少の一途をたどっていて、年齢制限の40歳になってただ卒業という訳にもいかず理事長をやらせていただいた。

イベントを通じ、声を上げてたくさんの人を巻き込んで協力してもらえることが第一だと感じた。

(知事)

いま青年会議所の会員は何人か。

(C氏)

24人くらいである。

(知事)

秋田市の青年会議所も100人を切った。

(C氏)

どこの青年会議所も同じ状況である。

(D氏)

私の家業は花輪大町商店街で80年以上続いている酒屋で、現在は酒類販売と食品の卸をやっている。

高校を卒業していったん東京へ出たが、20代前半で戻り当時社長だった父に付いて商売を勉強した。10年ほど前に父が病気で他界してからは、社長になった母と二人三脚でなんとか来ているが、大型店が進出しドラックストアやコンビニでも必ずお酒を置いている状況で、商売は苦しい。

そんな中、会社を存続させるためには何らかの付加価値が必要と考え、一年半ほど前に日本酒の利き酒師という資格を取って、月に1回くらい日本酒の講座を持つようになったところ、常連のほか、大館からのお客さんもつくようになった。この春には更に焼酎の利き酒師の資格を取った。来年はウイスキーアドバイザーなどの資格を目指している。

基本的には自分の商売を中心とした活動をメインに、Aさんの「ふとっばらバンビーン」や青年会議所のイベントに参加させてもらったり、いろんな所から声をかけてもらえるようになった。今回もいい機会を得られて感謝している。

(E氏)

ラジオの営業を基本に、自分の会社や地域のPRでいろんな方たちとお話しをして、人と人をつなぐことができ、すごく誇りに思っている。

FM番組「かづの創生～市民が増える街づくり～」を担当して、市民に話を聞いて、鹿角には何が重要かというところを深く掘り下げている。高校生がどのように鹿角を見ているのか、卒業後は地元に残りたいか出たいか、いずれ帰ってきたいかなどインタビューをして、それをゲストに聞いてもらい感想を話してもらう。

番組をやっていて、世代交流がすごく薄いなど感じる。高校生や中学生が地域の運動会などの行事

になかなか参加できなくなっている。今の子どもたちは学習と部活が忙しく参加する時間が無いため、鹿角の人や土地などその魅力になかなか気づけない。

若い人たちがどういった大人がいるかもわからないというところで地域の関連性、関係性、人とのつながりが薄くなっている。

インタビューのあとに、「両親に何で鹿角に住んでるか聞いてごらん」と伝えている。まずは家族で地域の魅力を共有するというのが必要でないかなと思っている。手間はかかるが、自分が動いてコミュニケーションを取りながらPRしていくことがすごく大事だと思う。地域活動に関心のない人たちにどうやって働きかけるかが重要で、市民全体に自分たちの生活に関わる課題や問題を認識させて、これを行政と民間と市民とみんなと一緒に連携するのが最終目標である。

(知事)

きりたんぼFMはいつごろ開局したのか。

(E氏)

平成25年10月8日である。

(知事)

県内では何番目か。

(E氏)

県内では5番目である。

(知事)

放送範囲は。

(E氏)

鹿角地域をほとんどカバーしているが、大湯や湯瀬の山間部は少し難聴地域である。

(知事)

行政情報や災害情報は流しているか。

(E氏)

消防・警察・市と連携して、地域のためにできることを放送している。

(知事)

世代間交流とか地域活動の関心とかは面白いね。

(F氏)

去年8月に大阪から夫と猫2匹を連れて移住させてもらった。知事の猫好きをネットで知って移住を決めた。

鹿角市へ移住する方のお手伝いや、移住を検討されている方に対して鹿角市の魅力を発信している。

また9月には、首都圏在住の女性5名を鹿角市に招待して地域の魅力を発見していただき、鹿角市の男性と婚活するようなイベントを企画している。

(G氏)

読み聞かせのボランティアは、十数年前に小学校で読み聞かせ活動が盛んになった頃から始めたが、そのメンバーが中心となって5～6年前に「おはなしぼっくす」というグループを立ち上げた。

小坂図書館での活動となる、月1回の「おはなしランプ」のほか、小学校に出向いての昼の読み聞かせや、中学生への本の紹介と読み聞かせをしている。

そのほか、赤ちゃんを連れた親子のお話し会や、福祉施設の読み聞かせ、町民の読書活動などに取り組んでいる。メンバーが20代から70代まで各世代にいて、保健師さん、お母さん、子育て世代の方、観光案内人などが活躍している。

また、劇団「鹿角演劇を楽しむ会」のメンバーで、一昨年 of 国民文化祭のときにアマチュア劇団の祭典を小坂町康楽館で行った。それをきっかけに大館市の若い人たちの劇団と交流ができたので、少し演劇文化も元気になっていきたいなと思っている。

【意見交換】

(知事)

Eさんの、世代間交流が乏しい、地域活動に関心がない人が多いという話、これはどこでも問題になっている。

これは言っているかどうか、県南、県北、中央で違いがある。雰囲気が違う。

例えば成人式。秋田市は偉い人とか権威を認めない、市長が偉いとか知事が偉いとか誰も思っていない。

ところが県北は、とにかく何か行事があるとその挨拶の多いこと。市町村長から県会議員から市議会議員からなんとかの長の挨拶が多いこと。ものすごく権威的に見える。

秋田市は成人式の市長の挨拶は1分から1分30秒、あとは来賓紹介なし。県会議員が来ても市議会議員が来ても来賓紹介なし。成人式は成人の人のためにある。そうすればいさかいはあるが、成人式の出席率がめちゃくちゃいい。こっちに来ると何の行事でも序列があるみたい。

秋田市にいと、県北の情報は秋田市まで来ない。何をやってるかよくわからない。県庁にいて、いろんな市町村、地域からいろんな祭りやイベントのポスターとかPRとか、結構県南からは来るけど、県北からはあまり来ない。

鹿角の祭りはよく呼ばれる。地域の行事を自分たちのためだけにやるのはそれはそれでいいが、一方で観光をどうしようかと言う。

昔からある祭りや行事をある程度オープンにして、その地域がみんな楽しんでるようにすると、外から来る人にとっても観光の一環に見える。

こういう活動すると好きな人は集まる。ただ、そこで何かおもしろいことを、何か新しいアイデアをやるうとするときに、地域あるいは一定の権威的な力のあるところが、それを素直に吸収するか、県庁の地域振興局も含めてどうか。

県南に行くともみんな一緒にやっている。大曲の花火に行くとき商工会議所の会頭が半てん着で駐車場整理をしている。県北は場所によってはトップは動かない。政治家だけが上に座っている。何か違う。

皆さん方がやっていることについて広がりをもつというのは、そういうところが浸透できるかどうか、世代間交流、「おら若いから」とか、「偉い人がやってくれればいい」となると、若い人に覇気が無くなる。

地域活動では、グループでがっちり固まってオープンでない。全県からするといつも感じるのは米代川沿いがそんな感じである。

(A氏)

米代川沿いは食べるものに困らなかった地域、私も中学校2年の時に鹿角に来てそれからは出たこ

とがないが、一番最初に来たときにはすごく厚い壁を感じた。

鹿角でも核家族化が進んでいて、家族の世代間ギャップを体験する機会が少なくなっている。私自身、子供2人いるが、私は核家族で育った。

いろいろな土地で、おじいちゃん、おばあちゃんの話をする友達がうらやましかったので、私は自分の子供にはおじいちゃん、おばあちゃんとの生活を体験してほしいと思い結婚して同居したが、たぶん中央・県南よりも、県北の方がそういう同居世代が少なくなっている。

少子高齢化で、地域で見守る子供たちが少なくなる一方で、老人だけの家庭が増えており、そこで交流が少なくなっている。同居が嫌だという家庭の子供が親になり、他の世代の考えを理解しない人が多くなっている。

花輪の祭りは、七夕、花輪ばやしだが、後継者が不足しているので、地域外から参加してもらおうという取組をここ数年やっているが、世代間の壁がネックになって地元でも参加しない人がいる。

(知事)

Bさんが住んでいるのは大湯か。

(B氏)

私は花輪で、会場のすぐ近くである。

(知事)

たとえば花輪ばやしなんていうのは、大湯から参加しているか。

(D氏)

参加される方もいる。元々は10町内の神事、お祭りだったので、町内の子どもと、40歳までの青年しか参加できなかった。

現在は本当に人がいなくて、私の子どもの世代からお祭りやってみたくて参加する他地域の子はいたが、ここ10年くらいは大湯や小坂、東京から参加する人が徐々に増えて、ほとんどの町内で、町外の人が半数程度参加している。

(知事)

どこの祭りもそうでないともたない。

(D氏)

花輪ばやしは、他のねぶたとか竿灯とかみたいに企業がもっているようなお祭りではなく、町内が住民からの寄附金をいただいてまかなっている。そこが花輪ばやしに関してはせめぎ合っているというか、資金と人手が不足してきて企業にお願いしようという意見もあったけど、国指定文化財になってそれは出来なくなってしまった。

今後寄附金だけでまかなわなければいけないが、花輪ばやしは元々町内の子が小さいときから大人の人に指導されて交流がとにかく盛んだった。花輪の祭りは42歳の数え歳で卒業してしまうのでそれまで精一杯努めて、その後は自分の子どもを指導したり、子供会に入って指導したりとか、大人同士もすごく交流はあったが、今は外から入ってくる子が参加する町内の上の人たちを全く知らないので、若者と年寄りの交流がずれてしまうことも出てきている。

(知事)

町内のコミュニティが分からない人にとってそこら辺に課題がある。物理的にはどうしようもない

けども、心情的なつながりが薄いから、祭りで事故が起きたり、統率が乱れることが出ている。
青年会議所で女性の理事長というのは普通にいるのか。

(C氏)

数は調べていないがほとんど男性で女性はすごく少ない。鹿角は女性は私一人。秋田県の中のもの他の団体だと女性は少しいるが、3人とか多くて5人とかである。全国的に見ても都会の方は女性がいますが、理事長となると秋田県内では私以外では2人だけであった。

(知事)

青年会議所も他の団体も同じで、対象者がいてもなかなか入ってくれない。

(C氏)

商工会、商工会議所などあるが、他の組織団体に入っていて、あっちもこっちも大変だというのが一番大きい。毎日のように打合せとか新年会シーズンとか結局人が減っているけど既存の団体数は減らないのでみんなあちこち掛け持ちになっている。

(知事)

商工会の青年部と青年会議所とごっちゃになるときがある。社会貢献と商売をある程度折り合い付けて一緒にやるところも出てきている。

青年会議所の場合、中心部の旧市街地の集まりと捉えている人もいる。都市部の集まりだというイメージを持っている人が多い。

(C氏)

地域的、地理的、距離的にあまり離れたところの人はやはり、入会はむずかしい。

(知事)

Dさんはお酒が分かるのか。

(D氏)

飲んで何の銘柄だというのは分からないが、飲み方を提案したりしている。

お客さんからは、おいしいお酒を紹介してくれと言われるが、おいしいお酒は100種類もあれば100通りで、感じ方も人それぞれなので、その人がどういうお酒が好みなのかというところをいろいろ話しながら好みに合うものを紹介している。

(知事)

量販店はどこも安くなっているけれども、量販店で買う場合、全部銘柄で選ぶ。有名な銘柄をみんなおいしいと思って買う。

「獺祭」のホームページに良いことが書いていた。獺祭ってそんなに高い酒でない。転々と転売しながら高くなる。そういう意味で、われわれ酒飲みは、いい酒ではなく自分に合った酒を選ぶべき。

(D氏)

杜氏はまずいい酒を作って出している訳ではない。自信をもって一品一品出している。

(知事)

酒はいろんな風味によって合わせていくから、純米大吟醸が純米酒よりおいしいとは限らない。純米酒が好きな人がいるし、おかずによっても違うし、まさに今そういうテクニカルな面で付加価値を付けるということがお酒には必要だと思う。

(D氏)

うちも酒屋として、付加価値を付けて売っていきたいが、単体では厳しくなっている。商店街の通行量も減ってきているし、住民も減ってきているので、商店街各店でそれぞれが個性をもって付加価値を付けた商売をして欲しいと考えている。

うちは酒屋だが、ドラッグストアに行ってもコンビニにいても同じような物が置いている中で、自分がお客さんにお酒を紹介するために利き酒師の資格をとった。

うちの商店街はスーパーが一軒もなくなって、生鮮品を買うのに車で農協、Aコープに行ったり「いとく」に行ったりして、商店街に行く必要がなくなっている。その中でうちは割と自分が発信してお客様を獲得しているように見えるけど、それだけだと商店街や地域としての商売は成り立たないので、どうしたら個々の商店がもっと楽しく商売できるかなと考えている。

(知事)

日本酒は肉に合う酒、つまみと酒の取り合わせが面白い。それが商店街にコラボして、飲み屋さんにはやっている。

いろんなお酒を置いている店で、マスターこれ何を肴にすれば良いかと聞く。むやみに高い酒を買っても美味しいとは限らない。秋田市でもそういう店が出てきた。今日はちょっとあまり濃くなくていいから合う酒を出してくれと、そういうのを大いに広げて欲しい。

(D氏)

鹿角の飲食店は地酒の千歳盛は必ず置いているが、他の地域の日本酒はなかなか置かない。観光地として他県から観光にくる方は秋田の酒が飲みたいと言う。そうになると鹿角の地酒しか無いと選べない。地域の人たちにもそういう意識がまだまだ根付いていて、鹿角は鹿角のものだけだ、という感じになっている。

それも大事だが、他から来た方はいろんな地域の地酒が飲みたいという方が多いので、もうちょっと普及させたいと思う。

(知事)

Eさんの世代間交流、若い人もお年寄りも同じ価値観でやれるイベントがあれば。

(E氏)

成人式は成人する人たちのためのものとおっしゃったとおり、参列される方たちは見守る立場。鹿角のイベントを若い人に「やれやれ」とけしかけるけど、「いや、それはやっちゃいけない」とか、「これはどうするの、いくらかかるの」とか、周りの大人たちの口が出てしまう。

大事なんですけども、それを言われるとじゃあやらなくていいって若い人たちが思ってしまう。見守ってあげる仕組みを作るのが必要だと思う。

(知事)

昔は、小学校の運動会で、酒とお重を持ってグラウンドにシート敷いて親戚で楽しんでいたものだが、自分の子どもの運動会の時に、クーラーボックスにビール入れてお酒入れていったら、学校の門のところで、酒の持ち込みを断られた。子どもたちは中で弁当を食べていた。

その時はどうしようもなかったが、市長になったときに全面的に変えさせた。グラウンドの一定のエリアでは保護者が酒を飲んでもいいことにした。そうしたら、地域の大人たちが、普段つきあいが無い人も、同じ町内の子どもたちを応援している。

事件、事故があってはならないから、最低限安全安心、非行の防止は必要だけれども、バリアをあまり張るから自由にやれない。市長になったときに学校のグラウンドは運動会に限っては飲んでもいいと、そうやったらものすごく盛んになった。そこに連帯感が生まれる。そこら辺が固いんだな。

(E氏)

徐々に気づかないところから固くなっていく。

(知事)

Fさんは大阪出身だが、こっちへ来て正直どういう感じがした。

(F氏)

いいこといっぱい感じていて、住みやすいと思っているけど、最初に面接で鹿角に来たとき、ちょっと暗いイメージがあった。鹿角の観光の看板も廃れているような感じで、本当に元気になる感じがあるのか、移住コンシェルジュで移住を呼びかけているけど、本当にウェルカムな雰囲気あるのかなと思った。

初めて観光に来る人は第一印象ではあまり良く見えないかもしれないけど、掘り下げしてみるとすごくいいところで人も優しい。

ご近所の方にも、最初は知らない人が来たと声をかけてもらえないかなと思ったが、雪囲いのやり方を教えてもらったり草刈りもしてくれたり、今は毎日が笑っていられる状態で、ウェルカムな雰囲気で迎えてもらっていると感じる。

(知事)

移住の話は具体的にあるか。

(F氏)

移住を楽しめるツアーを企画したり、首都圏に行って移住フェアを開いたりしている。27年度は移住したのが7組15名、実際私たちのプログラムで移住体験に来てもらって、今年は既に7組16名で昨年度を上回っている。

(知事)

移住された皆さんはどこに住んでいるか。

(F氏)

鹿角市の「空き家データバンク」で空き家をリフォームして住んでいる方もいる。若い男性はアパートに住んでいる。

(知事)

都市部から移住した人が、地元の人との“間合い”が難しいと言っていた。

例えば、地元の方は親切心で、雨が降ったときに洗濯物を下着も含めて全部取り込んでくれるが、ぞっとしたそう。間合いの取り方なんだな。

都市部は小さいときからある意味、人の生活に入り込まない。そういう習慣の中で育つとあまりに

も馴れ馴れしくなると抵抗がある。地元の常識と、都市部の常識は違う。

(E氏)

地域に入ってきたのに地域の人たちに迎えられている感覚が未だに持てないとか、頼んでもいないことが既になされているとか、鹿角も少なからずあると思う。

(知事)

極端にシリアスになる必要はない。人口減少が進んでいるから移住者を増やさなければ将来消滅するとか考えなくても、住むのにいいところだから長く住んで欲しいと言うくらいの気持ちでいいと思う。固く移住定住事業と、役所の事業みたいに考えないでいただきたい。

読み聞かせは大切である。本を読む、活字に触れるので子どもたちは結構楽しんでいるか。

(G氏)

本当に喜んで迎えてくれるし、話しかけてくれる。どこの学校でも読書の時間があると思うが、自然に本をとって読んでいると思う。

(知事)

どんなところで読み聞かせしているか。

(G氏)

私たちは小学校や図書館でイベントやったり、小坂町のカフェや社会福祉協議会でやっている「みんなのお家だんらん」で読み聞かせをしたりしている。

(知事)

将来こういうことやりたいとか、悩んでいること、課題があったら聞かせてほしい。

(A氏)

今回のテーマは「女性の活躍による地域活性化の推進」だが、私が高校卒業後地元就職したときは男女雇用機会均等法が始まった年で、盛んに女性の役職登用や、総合職に女性を採用していた。

男性社会がずっと続いた中で女性を活躍させるステップが必要となっていて、私の女性上司がいきなり管理職に昇進したが、かなりのプレッシャーで早期退職していた。やっと今の年代になって、私の年齢から下ぐらいの方が管理職に登用されるのが当たり前になってきている。

女性の活躍推進は時間のかかること。鹿角のなかでも中心部と農山村部では、家庭でも地域でも意識が違っている。私たちが学生時代は男女分け隔てなく教育を受けてきたけれども、社会人になった途端に男性はこうで、女性はこうでと言われてきて、心の中で葛藤があった世代だと思う。

特にBさんは草分け的な存在で、かなりプレッシャーがあったと思う。これからまた更に時間をかけてゆっくりと解決していかなければいけないと思っはいる。

家庭の中でも会社でも、男性が女性の足を引っ張るという印象がある。アイデアが採用されて進んでいっても、何か一つミスをする、降格させられるというのが未だにある。

例えば、今日知事と話してくるっていう話をしても、そういう所には行かないでくれとか言われるようなことがまだまだある。

(B氏)

農家の奥さんたちは、旦那さんの下で動いている状況が多い。

旦那さんがこれをやれと言え「はい」、そうではなく共同作業ではあるけれどもっと自信を持って、農業を自分の職業という気持ちを強く持って技術をレベルアップして、100本ある木のうち10本は私のだから手をかけないで欲しいという状況に持っていきたいと思っているが、まだまだほど遠い。

講習会にも出たいが、講習会には旦那さんが出て奥さんは家で仕事。今日は北海道に行く、終わったら迎えに来いというパターンが今まで続いている。

そうではなく、女性も平等に同じ人格だと考えれば、もう少し歩み寄ってもいいのではないかと思う。今日は講習会がある、講習会には私が行ってくる、終われば食事会で飲むかもしれない、そういう日があれば年一回でも旦那さんに協力してほしいがなかなか難しい。

もっと農業という自分が毎日携わっている仕事に自信を持って私はこうしたいんだ、という意思表示ができるようにしたいが、ある程度の知識がないと旦那さんにすら言えない。

(知事)

その面での男性の勉強会というものがなかなか無い。農業も機械化されれば男性も女性も同じ。

(C氏)

私の店の従業員も、親の介護で働き方が今までと同じようにはできなくなっている。私たちの親の世代は団塊の世代。今は70代後半～80代になって、今後倒れたら介護する人が必要になる。

全ての人が施設に入所できて任せられる訳では無い。どうしても世話する人が大変になる。お嫁さんが仕事を休んで自宅で介護するようになると、お嫁さんだけでは体力的にも精神的にも大変で、当然旦那さんも負担が増える。介護は男女関係なく人手が必要になると考えた時に、どちらでも働き方が変わってしまう。

雇う側も忙しい時に休まれるとつらいし、従業員にも無理なく働きながら介護してもらいたいし、会社側も人が足りなくて大変という苦しい状況が続くような経営はしたくないので考えていかなければならない。

(知事)

介護の問題は日本の農村部でも都市部でもどうしても女性主流に偏ってしまう。

フランスの子育ては意外と男性が多い。フランスはソフト産業が多く、奥さんの収入も多いため旦那さんが子育て休暇を取っている。日本は男性の給料が高く、女性が補助の状態なので女性が面倒見るようになる。

歴史的な経緯もあってなかなか答えが見つからない。どう最善を尽くして、最も効率的にやるか行政も難しいところである。

(D氏)

商店街で暮らして37年、今後30年は商売しないと自分の生活ができないと思う。30年商売を続けるとなると相当な覚悟が要る。そうなると周りの商店も一緒になってがんばってもらわないと続ける事はできないと思う。

自分と同世代の娘・息子・お嫁さん、親世代でまだお店をやっている方は、自分の子どもには継がせない、商売は厳しいしそれなら役所に入ってもらいたいという人も多い。自分の世代でも子どもには継がせない、自分の好きな事をしてもらいたい、店は自分の代で終わらせたいという話をする。

父・祖父の世代から地域で苦勞して商売をやってきたので続けているが、今はネットで何でも買えてしまえるので売り上げも厳しい。子どもたちを食べさせていくだけの商売ができない。商店の話を聞いていくと、みなさん気持ちが疲弊してしまっている。

自分は今は仕事が楽しく思えるようになったが10年くらい前までは本当につらい状況であった。前向きに明るく楽しく商売をしてもらうにはどうしたらいいのかと考えている。その中で一番現実味があるのは女性のパワーを使うこと。

商店はだいたい奥様・お嫁さん・娘さんが店頭立っている、旦那さんは事務所にいたり会議や懇親会で外に出て店でお客さんと接する機会が少ない。旦那さんがいくら外で偉い人の話を聞いてきても現場にいるのは女性なので、女性が商売に対して前向きになってもらえるかどうか、これからの鹿角で商売される方たちのポイントだと思う。

一年前に大町商店街の女性10名で大曲の花火通り商店街へ見学に行った。花火通り商店街の皆さんはすごく努力されていて、見学した奥様は良いお店の工夫をすぐ吸収して前向きにうちのお店でもできる、真似しようと宝をたくさん持って帰ってきた。

ところが、それを反映しようとしても旦那さんに止められてしまう。男性と女性との思いの差がある。見学に行った事はすごく大きな成果だったので今後も意識改革でどんどん外に連れて行きたいと思っている。

県内でも街ゼミを開催している。商店・企業が市民の方に講座を持って自分の商売を紹介して、少しでも新規のお客さんに来ていただけるようにしている。鹿角ではまだ開催がされていない。なんとか街ゼミの企画を出してやっていきたい。

(知事)

仙北の乳頭温泉郷には、今一番海外から人が来ている。女将さんたちが夜に集まって韓国語の勉強を自分たちでやっている。

観光のPRも女将さんたちが旅行会社を訪問している。だから来る。温泉旅館を現場で切り盛りしているのは女将さんなので、女将さんが行った方が臨場感が出る。

一方、社長は部屋の数とか設備について言えるが宣伝できない。女将さんは自らが勉強会をやって中国語・英語など簡単なあいさつは一通りできる。社長が宣伝してもパンフレットを渡してもお客が来ないのは当たり前、全部SNSで発信されている。

海外に行って女将さんが着物を着て説明すれば雰囲気が出る。乳頭温泉郷はタイ人で賑わっている。この商売は女性の商売だ。

(E氏)

関心の無い人たちへの働きかけが私の中では大きい課題。

きたんぼFMのキャッチコピーは『鹿角の元気にスイッチオン』。鹿角にはこんなに魅力的な人がいるのに、関心を持ってもらえないのは非常にもったいない。

まずは地元の人たちに地元の事を知ってもらおう。その上で何が必要か考えてもらおう。考えて行こうという意識を私たちがラジオの中から発信して、聞いてくれる方にちょっとずつでも意識改革できていけばと思う。

フェイス・ツー・フェイスで直接会って話をしていくこと。

地域での高校生・中学生向けのイベントが足りないので、コモッセを活用して有志の高校生に実行委員になってもらってやろうかと会社で話している。いつかそれを早い段階で実現できるような働きかけをしていきたい。

(知事)

湯沢市の全国うどんサミットは、高校生がボランティアで参加している。

全国の30種類のうどんに、それぞれ高校生が担当して競争する。高校生は自分の担当するうどんを勝たせたくて一生懸命呼び込む。

高校生が携わると戦力になるし、商売を覚える事にもなる。全国の人たちと交流が始まる。高校生はやる気を出すと体力もあるから力になる。大人もうまく組み込んでしっかりした役割を与えると力強くなる。

(E氏)

鹿角に対して魅力が無いという高校生が本当に多い。

そこをあきらめないで欲しいし、あるものを見つけて欲しい。大人にも鹿角も捨てたもんじゃないなと思って欲しいので、そこを最終目標に、若い人たち・学生から世代の交流を作っていきたい。

(F氏)

私は移住者だが、PRが課題。イベントをやっても人集めに苦勞するのがほとんど。東京駅のすぐ近くの移住・交流情報ガーデンには、全国市町村の移住パンフレットなどの情報がある。どこもPRしているのは、「温泉がある」「大自然に囲まれている」「人が優しい」。

鹿角は桃も美味しい野菜も美味しいと伝えているが、聞く人からするとどこも一緒なので、他の地域との差別化がなかなかうまく出来ない。

実際移住先を探している人は、全国どこでもいい、良いところがあれば行きたい。私も実際にそうだった。

大事なのは鹿角市の名前を早い段階で知ってもらうことと、その後の対応。移住コンシェルジュの役割が重要になってくるので、仕事に重みを感じながらやっている。

(知事)

取っかかりはイメージ、オープンなイメージである。

自然が豊か、風景がきれいは当たり前。全体的なイメージとしては、田舎であってもある程度の文化レベルが感じられるところになる。これは一定の文化レベル、文化的な施設があるとかそういうことではない。

銀座四丁目に「あきたびじょん」の大きな写真を貼ろうとした際、最初断られたけれども、その写真を撮影したのが木村伊兵衛氏、日本のトップのカメラマンだということを知って貰ったらすぐOKが出た。これでさぞかし秋田は良いところだろうという文化的なイメージが出る。

地域の文化レベルをどう発信するか、単なるお祭りがあるとかではなく、ここへ来るとこういう勉強ができるとかこの分野のレベルが最高だとか発信できるかどうか。市町村でもかなり差がある

(G氏)

芝居を通して文化を発信する取組を続けたい。

ずっと芝居を続けてきた70代、80代の方、その下の世代のすごく熟をもってる40代の人たち、その下の高校生など一緒にやっていて世代間交流ができていく文化だと思うので、小坂町の康楽館を活用してやっていきたい。

女性の活躍と言うとき、私も10年ぐらいPTAの役員をやってきたが、夫には事後承諾で、いろいろ文句を言われながらも家事や子どものご飯を準備をしてから研修会や演劇に出かけた。男の人ならもっと自由に家事もなく、一泊の研修にも行けるだろうと思いつつなんとかやってきた。

若い世代は旦那さんがご飯作ってくれるという話も聞くので、PTAに限らず文化的な芝居でも踊りでも歌でも、働く世代も子育て世代も文化を発信していけるように呼びかけていきたい。

(知事)

康楽館の芝居は毎日やっているのか。

(G氏)

劇団の人たちが、常打芝居を毎日上演している。

(知事)

康楽館、芝居小屋の使い方をもっと考えたい。例えば子どもの歌舞伎もある。文化会館でやるよりもそこでやれないかなと思う。

毎日商業演劇を上演しているから出来ないかもしれないが、なんかもったいない感じがする。むしろアマチュアの、鳥海子ども歌舞伎とか、そういうものを康楽館でやったらまた別だと思う。

康楽館に行ったことがない人もたくさんいる。毎日商業演劇でなくても、鳥海子ども歌舞伎もすごくいい、日本舞踊もああいうところでやるのは非常に雰囲気がある。そういう活用の仕方でもた人が集まってくる。そういう発想は誰も言わない。

むしろ何日か一般に使用を開放してやってもいいかもしれない。町長に言ってみる。

(司会)

ありがとうございます。知事の司会によって皆さんのパワーを引き出してもらって、様々な分野の話聞かせてもらい、非常に有意義だったと思う。

改めて地域間の違い、世代間のギャップなどの課題も考える機会になった。

随所にいろんなヒントが出たような気がするので、今日の話をもっと大ききうねりとしてつなげていければと思う。

行動で輪がどんどん広がっていく、それを阻害するのは役所的な制約というか、失敗したとき誰が責任をとるんだという制約を感じているところもあろうかと思うが、そういうところを打ち壊していくのは小さな実績の積み重ねである。これからは女性の時代であるというのは間違いないので皆様方の活躍を期待したい。

本当に今日はどうもありがとうございました。

(終了)